

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：47201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04645

研究課題名(和文)短大生の体験的レディネス・アウトカムの特性とその関係性に関する研究

研究課題名(英文)A Study on the Characteristics and Relationships of Experiential Readiness Outcomes of Junior College Students

研究代表者

藪 敏晴 (Yabu, Toshiharu)

佐賀女子短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：20280266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：「体験的学修に関するレディネス調査」を通して、短大生の既得体験の実態が分野別に明らかになるとともに、都市部と地方の学校間でかなり異なる特性があることが明らかになった。また、韓国蔚山と北部九州の短大生との間には、日本と韓国という属性では一般化できそうにない差異があることが明らかになった。長崎の四大生と短大生の間には、分野別にみた場合、大きな差異はなかった。「卒業生のインタビュー調査」を通して、卒業後10年以上経過した場合、社会で有効な力を短大で身に着けたと感じる卒業生はほとんどおらず、逆に卒業年が近いほど短大での体験的学修が質量ともに増加しており、かつその有効性を感じていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでに前例のなかった短大生の体験的学修のレディネスに関する調査を、韓国の短大生と長崎の四大生をベンチマークとして実施し、その実態を明らかにすることができた。また、同時に実施した卒業生の体験的学修に関するインタビュー調査によって、短大卒業生の世代間の学習成果に質的差異があること、また、それらが短大の教育改革の進展と深くかかわることが明らかになった。併せて、体験的・活動的学修へと急速な転換が進む短期高等教育に必要なコアカリキュラムの構築に向けて、議論の土台を構築した。

研究成果の概要(英文)：Through the "Readiness Survey on Experiential Learning," the results showed the current status of the learning experiences of junior college students at each study field, and it became clear that there were quite different characteristics between urban and rural schools. Also, it revealed that there are differences between junior college students of Ulsan, Korea and of northern Kyushu, but the differences are not related to the country attributes. There was no significant difference between the four-year college students and the junior college students in Nagasaki in terms of their study fields. Through the "Interview Survey of Graduates," when more than 10 years have passed since junior college graduation, few graduates feel that they have acquired effective learning. Conversely, it became clear that the closer their graduation years are, the more quantity and quality of experiential learning are, and also more graduates feel the effectiveness of their learning.

研究分野：教育社会学

キーワード：短大生の体験的レディネス 短大生の体験的アウトカム 短大のコアカリキュラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 新しい学校種の創設や、教育の質的転換など、短期高等教育をめぐる環境はこの十数年間で激変している。その渦中であって、短期大学に所属する本研究代表者・分担者は、北部九州の7短大で結成された短期大学コンソーシアム九州の研究センターを中心に、これまで2回の科研究を始めとして、短大教育のあり方について様々な研究活動を続けてきた。本研究は、これらの調査・研究を通して得られた知見を基に、その過程で明らかになってきた課題について明らかにしようとするものである。

(2) 短期高等教育も他の高等教育機関と同様に、従来の座学中心の学修から、アクティブラーニングに代表される体験的、活動的学修への教育の質的転換が急速に進んでいる。このような質的転換を行なうには、教育対象の学生がどのような体験的・活動的経験を有して入学してくるのか、また、それらがどのようにアウトカムに関わっているのかを明らかにしておく必要がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、短期大学の体験・活動的コアカリキュラムの構築に向けて、北部九州の短大を対象とし、その入学生のレディネスと卒業生のアウトカムについて、体験・活動を中心に調査分析して実態と特性を把握するとともに、体験・活動的レディネスとアウトカムとの関係について明らかにしようとするものである。

(2) 本研究は、今後必要とされる短大教育を、従来の座学中心から様々な体験を通して実践的総合力を育てるアクティブな学びにあるととらえ、その基盤となる様々な体験に関する北部九州の短大生のレディネスのアンケート調査と、短大時代の体験的学修が社会人としてどのように機能しているかについての卒業生へのインタビュー調査を行ない、それらを通じて短期大学の体験的・活動的コアカリキュラム構築のための理論枠組みを作ろうとするものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、最終的な目的である、短期大学の体験的コアカリキュラムの構築に向けて、以下の2種類の調査を実施する。

短大生の体験に関するレディネス調査。短大生の既得体験の実態を把握する。

「短大時代の体験的学修成果の社会における有用性」を中心とした卒業生のインタビュー調査。卒業生の短大時代の「体験的学修」成果の有用性とその限界を把握する。

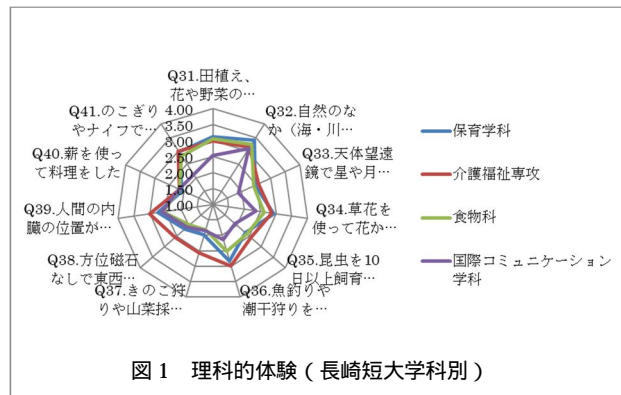
(2) 両者の分析結果の比較検討を通して、今後短期大学で展開する「体験を基盤とするコアカリキュラム」の構築に向けて、理論的枠組みを作る。

4. 研究成果

(1) 「体験的学修に関するレディネス調査」を通して、短大生の既得体験の実態が分野別に明らかになるとともに、都市部と地方の学校間でかなり異なる特性があることが明らかになった。また、韓国蔚山と北部九州の短大生との間には、日本と韓国という属性では一般化できそうにない差異があることが明らかになった。長崎の四短大生と短大生の間には、分野別にみた場合、大きな差異はなかった。

(2) 「卒業生のインタビュー調査」を通して、卒業後10年以上経過した場合、社会で有効な力を短大で身に着けたと感じる卒業生はほとんどおらず、逆に卒業年が近いほど短大での体験的学修が質量ともに増加しており、かつその有効性を感じていることが明らかになった。短大の教育改革の進展の方向性の正しさが確認される事例である。

(3) 短大生の既得体験を分野別にみた場合、理科的体験で言えば、図1に見られるように、保育系や食物栄養系の学生が田植えやのこぎりを使った経験がある程度しているのに対して、国際系の学生はそのような経験値がかなり低く、介護系の学生は磁石を使った経験やキノコ狩りなどの体験を相対的に多くしていることがわかる。また、図は示していないが、食物栄養系の学生は包丁を使って料理をした経験型コースに比べて突出して高く出ている。このように、分野別の既得体験の実態が明らかとなった。



(4) 図2、図3に見られるように、長崎短大と佐賀女子短大のレーザチャートが比較的近い形を示しているのに対して、同じ北部九州にありながら、福岡という都市部に所在する香蘭女子短

大のレーザチャートは、田植えやのこぎりを使った経験値が低く、長崎、佐賀に比べるとかなり特異な形をしている。また、蔚山科学大学も田植えの経験値が低く、戦争の話聞いた経験値などは突出して低い。香蘭は、佐賀女子・長崎よりも、むしろ蔚山に近い部分さえあって、都市部に所在する短大の特性であるようにも思える。このことについては、今後、対象をさらに拡大する予定の今後の調査に俟ちたい。

(5) 図2、図3から明らかなように、短大生の理科的体験は相対的にかなり少ない。申請時にも「現代は急激な情報化によっていたるところで仮想現実を目にする時代であり、またコンビニ等の普及に伴ってモノ作りの機会も失われつつある。あるいは、原っぱや空き地も激減し、地方の都市化も全国で進んでおり、自然に触れる機会も減少している。短大生の体験的レディネスは教員世代よりも相当減少していることが予想される」と予想していたように、社会的体験だけでなく、その他の体験と比較しても理科的体験地の低さは突出している。

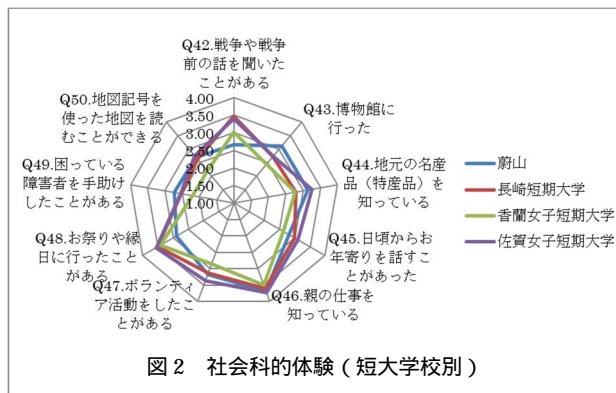


図2 社会的体験 (短大校別)

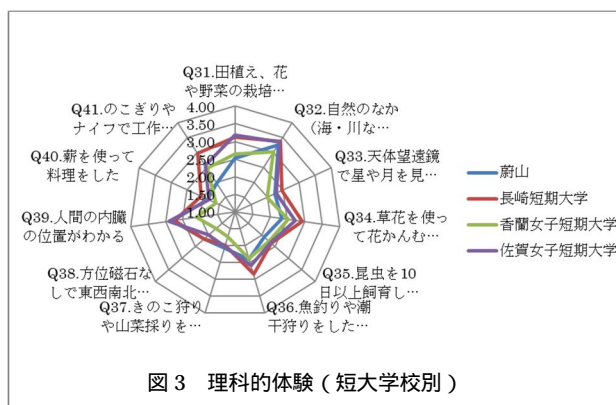


図3 理科的体験 (短大校別)

(6) 現在出版社に勤める卒業後23年目の卒業生からは、短大での学習に関して以下のようなコメントがあった。「地域連携活動やグローバル活動、ボランティア活動などは何もなかった」「知りたい事や興味のあることを図書館で資料を集めて考えたりする。インターネットで手軽得られる情報だけではなく、じっくり網羅的に調べ思考する事が身につきました。授業である程度まとまった文章を書くので、考える時間を取ることや考えをまとめる訓練になりました」「自分のやりたいこと、好きなことを思い切りやれた貴重な時間でした。文学を読む事が直接的に職業に役立つことはあまりないですが、古今東西の文学を読むことで視野が広がったり、想像力が付いて多少の事では動じなくなったかも知れません。心が鍛えられたというか」。これらのコメントから明らかなのは、彼女の短大時代の学習には、現在のような地域連携を軸とした体験的活動やグローバル活動などは存在していなかったということである。一方で、国語国文学を専攻していた彼女にとっては、専門分野の演習などが学習習慣を身に着けるのに役立ったわけで、古いカリキュラムには古いカリキュラムなりの効用があったことも分かる。

そのような古い卒業生に対して、養護教諭2種免許を持ち、現在臨探として高校の看護科で教員をしている卒業後4年目の卒業生は、以下のようにコメントしている。「地元の企業と協力してのレトルトリングの開発に卒業研究で取り組んだ。やっている時は、短大の授業としてこんなこともやらなきゃいけないんだ、っていう程度の感じだったけど、今にして思うと、会社の人と協働して何かを作り出すのは大切なことだと感じる。今の学校の仕事にも活かしている。また、レトルトのリングでパイを作ったり、それを何回も味見していいものにしてゆき、やったことが結果として出てくるのが楽しかった」。現在の地域連携活動を通したアクティブラーニングが職業生活に結びついている端的な例であるが、彼女からはさらに示唆に富む発言を得ている。「子どものころから勉強しろと言われた記憶はないし、部活(吹奏楽)も好きなだけやらせてもらった。小さい頃にプール、水族館や、公園に連れて行ってもらったり、図書館に行ったり、いろいろな経験をさせてもらった。毎週土曜日に図書館で読み聞かせを聞いたり、祖父母の家に遊びに行ったり、一緒に旅行に行ったり、小さなころの経験が大きかったと思う。ゲームを与えられたとかは全くなかった」。つまり彼女は本研究が調査している体験的・活動的レディネスをこれ以上ないほど持っていた学生なわけで、そういう学生にとって短大での地域連携活動を軸としたアクティブラーニングが有効だということがわかる。

(7) 卒業後2年目の卒業生からも、短大での体験的・活動的学修が社会に出てから役に立ったという発言が多い。現在認定こども園に勤務するAさんは、「ボランティア活動へ参加して、積極的に色々な人へ話かけたりしてきたことで、保護者さんと話すことへの壁が少し低くなった。一歩進んで話しかけてみようと思えるようになったと感じる」「手遊びなどの授業が役に立った。他にはふたばこども園との交流。美術の授業などでは素話やエプロンシアターなどを園へ行ったり、また園から短大に来たりしてくれたので、実習以外でこどもへの実践ができたことがよかった。実習とは違った状況でこどもたちと関わることがよかった」。また、現在保育園に勤務するBさんは、「ボランティアや地域連携活動に積極的に取り組んでいた。短大に入る前より人見知りしなくなった。短大でいろいろな活動に参加してきたが、外で活動するときには初対面の人

とコミュニケーションをとりながらする必要があるため、そこが短大に入ってから成長したと思う。それが今のコミュニケーションにもつながっていると思う。(短大のボランティアサークル)での活動はいろいろなことを体験できたことがよかった。短大に入っていないとやってないよねということが多くできた。例えばイチゴ農家のお手伝いなどをしなかったら、こんな流れで農家さんが動いて居るんだということは知らなかったと思う。このように、近年の卒業生の多くが、現在の短大の地域連携活動やグローバル活動を、社会に出てから役立つ効果的な教育として肯定的に評価している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 武藤玲路、桑原哲章、久保知里	4. 巻 9
2. 論文標題 短大フェスの成果検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短期高等教育研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藪敏晴、中濱雄一郎、武藤玲路
2. 発表標題 短大連携による職業・キャリア教育の実践
3. 学会等名 日本インターンシップ学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 藪敏晴	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 11
3. 書名 南里悦史他編『短期大学教育の新たな地平』2-3-2-1「短大生のレディネス調査とカリキュラム改革」	

1. 著者名 鹿毛理恵	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 10
3. 書名 南里悦史他編『短期大学教育の新たな地平』2-3-2-2「スマートフォン時代の短大生像」	

1. 著者名 藪敏晴他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 大学間連携共同教育推進事業事務局	5. 総ページ数 102
3. 書名 文部科学省平成24年度採択「大学間連携共同教育推進事業」短期大学士課程の職業・キャリア教育と共同 教学IRネットワークシステム 最終報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	安部 恵美子 (Abe Emiko) (00259714)	長崎短期大学・その他部局等・その他 (47303)	
研究分担者	長澤 雅春 (Nagasawa Masaharu) (00310920)	佐賀女子短期大学・その他部局等・教授 (47201)	
研究分担者	竹中 真司 (Takenaka Shinji) (60524824)	佐賀女子短期大学・その他部局等・准教授 (47201)	
研究分担者	中濱 雄一郎 (Nakahama Yuitiro) (90446229)	香蘭女子短期大学・その他部局等・教授 (47113)	
研究分担者	鹿毛 理恵 (Kage Rie) (90638826)	東京福祉大学・留学生教育センター・特任講師 (32304)	

